

論文審査の結果の要旨および担当者

| | | |
|------|-------|---|
| 報告番号 | ※ 甲 第 | 号 |
|------|-------|---|

氏 名
論文 題目 鹿谷 祐子

中世物語における女性像の研究
— 『我が身にたどる姫君』『新蔵人』『ちごいま』論—

論文審査担当者

主査 名古屋大学 教授 塩村 耕
委員 名古屋大学 教授 阿部 泰郎
委員 名古屋大学 准教授 大井田 晴彦

論文審査の結果の要旨

【本論文の概要】

本研究は、中世王朝物語とお伽草紙を対象に、物語の主要登場人物でもあり、作品の成立と享受に深く関与した女性に注目して解明しようとする。

第一部では、中世王朝物語『我が身にたどる姫君』を取り上げる。第一章は、『我が身』の登場人物である女三宮と一品宮について、「岩木」「奥の夷」という表現に着目して共通性と相違を考察する。珠数を繰る手つきの描写の類似も併せて、叔母に当たる女三宮が、物語後半の主要人物の一人である一品宮の先蹤として、物語の中で機能しているとする。第二章は、未婚の内親王が天皇の母後の代理として立后する准母立后と、それが時代とともに変化した非准母立后をめぐる諸事情が、『我が身』の物語の背景にあることを考証する。歴史資料を検証し、物語の叙述が、近い時代の立後の歴史事実のイメージに基づいていると推定する。

第二部では、お伽草子二作品について論ずる。第一章は、男女の異性装を扱う『新蔵人』を取り上げ、類似する先行物語である『とりかへばや』『有明の別れ』と比較し、男装の女主人公の性格が異なっており、それは「化け化けし」と表現される奔放かつ驕慢な性質で、それが新たな魅力を生み出しているとする。また、同時代の女流日記文学である『とはずがたり』を参照し、当時の女性の生き方の現実を反映した人物造形であることを指摘する。第二～四章では女装の稚児を主人公とした恋愛物語である『ちごいま』を取り上げる。種々の形態で伝わる諸本の特徴をおさえた上で、まず『源氏物語』の柏木と女三宮の物語や浮舟物語が与えた影響を指摘し、その文学的効果を考察する。また、『ちごいま』が作られ享受された中近世は、女性の文化参加が乏しいとされてきたが、『源氏物語』についての理解を前提とすることから、当時の女性の教養のあり方を論じている。

第三部では、西尾市岩瀬文庫に蔵される奈良絵本や絵巻について、主に書誌学的な検討を加える。第一章では、同文庫蔵、奈良絵本『住吉物語』について、多数ある諸本のうち、類似する中之島図書館蔵本、大東急記念文庫蔵本と比較検討して、本文の持つ複雑な性格を考察し、従来は末流の改作本として言及されることが少なかった同本を、近世期に物語を同時代的に発展させたものとして積極的な価値を見出だそうとする。第二章では同文庫蔵の二種類の『西行物語』絵巻を取り上げる。うち一本は、国会図書館蔵本と祖本を同じくする本とし、また摸写者の高川文筈の画業を紹介する。もう一本は、類似する采女本系の他の諸本と比較し、重要な相違点について考察し、特に西行臨終の場面において、岩瀬本には阿弥陀如来像が見えないことに着目し、浄土真宗系の思想の影響を受けた改変である可能性を指摘する。

末尾に資料編として、第三部に関連する未翻刻資料である岩瀬文庫蔵奈良絵本『住吉物語』と、諸本の中で類似する大阪府立中之島図書館蔵奈良絵本『住吉物語』を翻刻掲載する。

論文審査の結果の要旨

【本論文の評価】

本論文は、文学研究史上、注目されることの比較的遅かった中世王朝物語とお伽草子（室町時代物語）について、さまざまな方法による解明を試みた、意欲的な研究である。

その方法は、第一に、物語の設定や社会制度について、歴史資料を広く参照して、同時代的なイメージを把握し、物語における働きを精密に吟味しようとしている。第一部第二章では、『我が身』の物語の重要な背景として、准母立后と非准母立后の制度の実態を、先行研究を踏まえつつ、歴史的に検証し、同時代的な読み方を提案している。第二部第一章でも、『新蔵人』主人公の、六位蔵人の兄弟同職について、歴史資料を参照し、類似の事例に対する日記の文言からそのイメージを探り、物語において主人公一家の隆盛ぶりを強調した設定であるとする。また、歴史資料ではないが、女流日記文学『とはずがたり』を参照し、『新蔵人』の人物設定と通底する同時代の女性の生き方を考察している。

方法の第二は、オーソドックスなものではあるが、先行する物語の影響関係を検証し、特に『源氏物語』を典拠として重視している。それは単なる影響関係にとどまらず、物語を享受する上で、典拠との間を行き来する、重層的な文学効果をももたらしていることを示唆する。また『源氏物語』を利用する際に、『源氏小鏡』など梗概書を見ていたことについても指摘するが、中世物語の作者による具体的な創作の方法の一端をうかがわせるものである。

方法の第三は、書誌学的ないし文献学的な吟味である。可能な限り諸本に実地にあたり、書誌的特徴を論述に活かそうとする。また、諸本に見られる本文の異同を丹念に比較し、その異同が何に由来するのかを考察して、作品の本質に迫ろうとしている。末流の本文についても軽視せず、本文変質の様相を、享受の実態を知る資料として積極的に考察している。

ただし、本研究の問題点としては、取り上げる作品がやや限定的で、中世物語の有する多様性と類型性の問題について切り込んでいないこと、物語のもう一つの重要要素である絵の分析が手薄であること、本文と絵との境界領域にある画中詞について新たな解明にまでは及んでいないこと、諸本の比較について書誌学的・文献学的追求が、関連の予想される範囲内にとどまっており、意外性のある発見にまでは至っていないこと、などが挙げられる。が、それらは今後の研究による補完が期待されるところで、本研究に見られるような、出来るだけ多様な視点に立ち、同時代に即して作品を読み直そうとする基本的な態度は高く評価出来る。

以上により、審査委員は全員一致して、本論文が博士（文学）の学位を与えるのにふさわしいものと判定した。